



和紙に映す

河瀬直美

フランスのポンピドゥーセンターにて河瀬直美特別展が開催された際、初めてインスタレーションをすることになり、そこでサークル状のスクリーンを創作し、これまでの自身の作品をコラージュした映像を投影することにした。この際、スクリーンの素材を日本古来の手漉き和紙で創作することとした。奈良の吉野では七世紀の初めに大陸から製紙技術が伝来したと伝えられている。水に恵まれた土地でその伝統が継承され続けてきたのだろう。

明治時代の最盛期では、吉野の国樺村で村の半数にあたる三百軒の家が和紙づくりに従事していたという。けれども戦後、洋紙を中心に需要が増え、現在では三軒を残すのみとなっている。そんな話を聞いて、この和紙の存在を世界の人々に伝えることはできないだろうか、というのがこのサークルスクリーンを創るきっかけとなった想いである。プロジェクトからの光を和紙が受けて、どれだけ映像を明確に再現してくれるのか、その厚みはどのくらいがベストなのか。実験を重ね、表からも裏からも映像を観ることができるよう厚みを決定して制作に入った。フランスの安全基準を満たすために耐火加工が必要となり、日本の技術を結集してその基準に合致するものを納品できた。実際、展示にあたっては、

火災の可能性を回避することも大切だが、人が自由に出入りできる空間に設置しているため、お客様がそのものに触れないで観覧してもらうためにはどうすればいいかを考えなければいけない。二十四枚のスクリーンをサークル状に設置しているので、その間に人が入ることができ幅を作ってしまうと、その出入りの際に和紙に触れ、破れてしまう可能性もある。つまり作品が破損してしまうのだ。そのための設置基準をポンピドゥーセンターの担当者何度もミーティングを重ね決定した。それゆえに最初に声がかかってから五年の月日が経過した。だから形になった時はとても感慨深かった。展覧会当日はたくさんの方に来場して



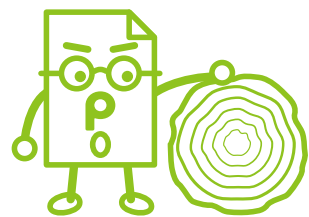
かわせ・なおみ ● 映画監督。
奈良市生まれ。カンヌ映画祭他、各国で受賞多数。代表作は「萌の朱雀」「殯の森」「あん」など。故郷奈良にて「なら国際映画祭」を立ち上げ後進の育成に力を入れる。東京2020オリンピック競技大会公式映画監督に就任。最新作「朝が来る」は2020年初夏公開。国立映画アーカイブにて河瀬直美展が開催中。2019年12月24日から2020年1月19日まで。

いただけました。その際、奈良の春夏秋冬を表現した通路の壁に、「春夏秋冬」の書をライブで書いた。大きな筆で壁に書き上げることは大変緊張したが、気持ちも良かった。昔、育ててくれた養父が書道をしている私に向かって、真つ白な紙の上に文字を書くことはとても難しいんだと言ったのを思い出していた。ポンピドゥーセンターでのインスタレーションを気に入ってくださったベルギーの文化施設BOZALの担当者が二〇二一年の夏にこの和紙のサークルスクリーンを三カ月に渡って展示してくれることとなった。もちろん、河瀬直美の映像作品の回顧展も同時に行う。東京オリンピックの公式映画監督に就任したこともあり、二〇二〇年を過ぎて、二〇二一年の夏まで待たせてくれたの機会を設定していただいたのも有難い。ポンピドゥーをブラッシュアップして日本の和紙の素晴らしさをベルギーでも伝えることができるのを楽しみにしている。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

無駄なく使うこと、得意です。

古紙のリサイクルだけじゃない。建築用の木材をつくるときに出た残りの部分や古い木材、曲がった木など、木材として使い道が少ないものも紙づくりには利用できる。そうやって、資源を無駄なく大切にしながら、紙はつくられているんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

有効利用している主な木材

- 製材残材** 建築用の木材をつくるときに出た残りの部分
- 低質材** 細い木、曲がった木など、製材には使えない木材
- 間伐材** 森を育てる過程の手入れとして間引かれた木材

<http://kamitsubu.com/>

今回は2月6日号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

奈良春日野国際フォーラム庭園にて

Photo: Shiro Miyake